

立松和平「海の命」を読む

山本欣司

はじめに

立松和平「海の命」が、小学校六年生用の国語教科書に採用されたのは一九九六年度（光村図書、東京書籍）。出典は立松和平作・伊勢英子絵『海のいのち』である（えほんはともだち25、ポプラ社、一九九二年）。シエア六割を超える光村図書の教科書に採用されていることもあり、学会・研究会等で取り上げられることもあるようだが、その解釈をめぐって書かれた論考はわずかしかない⁽¹⁾。

わたしが今回、小学校国語教科書教材「海の命」について考えてみたのは、ゼミ生が附属小学校で教育実習を行う様子を見に行くにあたって、あらかじめ教材に目を通しておこうと教科書を手に取ったのがきっかけである。教材としてというよりも小説として、「海の命」の抱える固有の問題点があり、読み解くことが困難であることに気づいたのである。わずか二千六百字程度の短編ではあるが（であるからこそと言うべきか）、どのような内容の小説かと問われたとき答えに窮する。特に、クライマックスシーンに訪れる突然の転回の理由が、簡単には説明できないのである。

わたしの感じた疑問については以下で詳述するが、光村図書や東京書籍の教師用指導書では何ら問題とされていない⁽²⁾。また、論文・実践報告等にも取り上げられていない。だが、実際に教室で、わたしと同じような戸惑いを感じる教師や児童はいないだろうか。

1

立松和平「海の命」はいわゆる三人称小説の形式をとり、透明で全知の語り手が物語を語る叙述形式がとられている。ところが、林廣親氏も指摘するように「語り手は最初から太一の意識に寄り添い、ひたすらそれを展開しようとしている」⁽³⁾。たとえば、太一の父の死は、事後的に距離を置いて描写されるのみであり、死が実際にどのようなものとして訪れたかを知ることが困難である。父が正面から瀬の主に戦いを挑んで負けたのか、たまたま勇を突いた相手が瀬の主だっただけなのか、瀬の主により死に追いやられたのか、自分のミスによる死だったのか等は不明である。おそらく、描かれた状況は太一の知り得た範囲と等しく、読者は、父の死の客観的な意味を確定することができない。

一方、にもかかわらず本文には、太一の内言（語り手によるミメシス）として「村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主」とある。太一が父は、瀬の主に破れて死んだと考えていることがわかる。父と瀬の主との間に、「破った／破れた」と表現されるべき主体的・積極的な関わりが存在したと認識してきたということだ。そして、語り手が太一の判断を相対化するに足る情報を提示してくれないまま、物語は展開する。

この場合、読者としては、太一個人の受け止め方にしたがって、作品内の出来事を理解していくしかないだろう。つまり、客観的事実の積み重ねによりストーリーを把握するのではなく、いわば太一の一人称で語られる小説のように、出来事を読み解いていくほかないということだ。これは、「海の命」の特質のひとつである。事実がどうであったかや問題とするのではなく、太一の主観によりそって、物語を把握するしかないのである。

ところで、このようにわざわざ断るのはほかでもない。客観的事実はともかくとして、「村一番のもぐり漁師だった父」が瀬の主に破れたと太一は認識しており、さらに彼が、瀬の主を「追い求めてきた」ことがこの小説のひとつの柱となることを確認した上で、そのことがかえって、この小説の解釈に困難をもたらすことを、わたしは以下で主張したいからなのだ。

*

「海の命」という小説は、主人公・太一の父が、「ローブを体に巻いたまま、水中でことごときれていた」ところから実質的に動き出す。太一にとってそれは、瀬の主に破れた結果と受け止められるものであった。「村一番のもぐり漁師だった父」とともに漁に出ることを将来の夢とする太一の、その夢がついえたところから物語はスタートするのである。

その後、漁師としての腕前に限っていえば、太一は第三節ではやくも一人前として与吉じいさから認められる。漁師としての成長を描くことがこの作品のねらいであったなら、ここで目的は果たされたことになる。それにしても、太一はなんとあつげなく「村一番の漁師」になることか。そこへ至る過程はすべて省略され、与吉じいさの「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。」という言葉によって唐突に、本人も気づかないうちに、作品半ばにして頂点を極めてしまう。与吉じいさの死後は、潮の流れが速くて、父以外の「だれにもぐれない瀬に」やすやすともぐる。その後もずっと「太一は村一番の漁師であり続けた」。

そういう意味で、そもそもこの作品は、太一が一人前の漁師になるプロセスを描こうとするものではないと考えた方が妥当である。「村一番の漁師」にならなければ手が届かない、次のステージを描くことに主眼がある。単純に考えるならそれは、父を失った後、ずつと彼の追い求めてきた「父を破った瀬の主」との対決であると結論されよう。「村一番のもぐり漁師だった父」ですら破れた相手と対決するためには、父を凌駕するほどの腕前がなければ勝利はおぼつかない。光村図書の指導書では『おとうといっしょに海に出る』という太一の夢は、あえなくついでにしまったかのように見える。だが、太一のこの夢は、村一番のもぐり漁師であった父を破ったクエを自らの手で仕止めたいという新たな夢に変わる。それは、偉大な父を乗り越えようとする太一の決意の表れである。」と説明されている。指導書通り、偉大な「父を越えようとする太一の成長の軌跡」を描くことが目的なら、「村一番の漁師」になったことなど、通過点にすぎないといえるだろう。

以上をふまえるなら、読者は当初、父を殺された少年が成長し、かたきと対決するという神話的な復讐＝成長譚として、作品構造を把握するのではないかと考えられる。父のかたきである瀬の主との対決へ向けて、主人公・太一が順調に成長し、「村一番の漁師」となるプロセスがメインプロットの前半部分である。そして、かたき討ちこそは、少年が父を乗り越え「本当の一人前の漁師」になるための通過儀礼であり、試練である。かたきを打ち破るにせよ和解するにせよ、そこで主人公に何らかのカタルシスや認識の変化が訪れることになる。与吉じいさはあくまでも、助言者としての役割を果たすのみであり、父と子の精神的紐帯が物語のかなめをなす。

ところが、そのように把握しようとした時、つぎの場面がどうしても、腑に落ちないのである。

もう一度もどつてきても、瀬の主は全く動こうとはせず太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

水の中で太一はふつとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にだけ、クエに向かってもう一度えがをお作った。

「おとう、ここにいられたのですか。また会いに来ますから。」
こう思うことよって、太一は瀬の主を殺さしないですんだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

瀬の主との対決というべきクライマックスシーンで、読者は肩すかしを食らったような印象を持つのである。ここまで、てつきり復讐譚だと思いついてきた読者は、「村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主」と太一がようやく決すのかと思いきや、はぐらかされる。瀬の主と対峙し、葛藤の末、太一はもりを打たないという選択をするのであるが、ここには、父のかたきとの対決という場面に見合った手応えがないのである。

おそらく、原因のひとつは、「これが自分の追い求めてきた幻の魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。」(傍線引用者)とあるように、自分の出会った巨大なクエが、本当に父を破ったあの瀬の主なのかどうか、太一に確信を持たせなかったところにある。単純に考えればこの場面は、父のかたきとして追い求めてきた瀬の主と、今まさに、ようやくめぐりあったという劇的なクライマックスとして描かれてもおかしくない。父の突き刺したもりの傷跡がどこに残っていたとすると、読者はすんなりと、この運命的な出会いを受け入れることであろう。だが、それをあえて、「岩そのものが魚のよう」というけたはずれな様子から見ると瀬の主であるのは間違いないが、父を破ったあのクエであるかどうかは不明なまま、太一と対峙させる。相手違いである可能性を否定できないのである(そもそも彼は、瀬の主を見たことすらない)。これでは、瀬の主と向き合いながら、もりを突くことができないう太一の葛藤の意味が曖昧とならざるを得ない。復讐というモチーフは、相手を見失い宙に浮く。

さらに、そもそも太一が、父のかたきを討とうとしているのかという疑問がわく。たしかに、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う」。しかしそれならば、「追い求めているうちに、ふいに夢は実現するものだ」という、彼の追い求めていた「夢」とは、光村図書の指導書通り、かたきを討ち「父を乗り越えること」だったのであろうか。そうは思えないのである。

村一番の漁師になった太一は、おそらく毎日、一本釣りで二十四の魚をはやばやと捕ると仕事を切り上げ、「父の海」にもぐり続けてきた。豊かな海の恵みに目もくれず、ひたすら「父を破った瀬の主」を追い求めて。では、太一は何のために瀬の主を追い求めてきたのだらう。やはり、父のかたきを討つためか。だが、太一はようやく巡り会えた瀬の主の、動かない「鼻面に向かってもりをつき出す」だけで、突き刺そうとはしない。「そうしたままで時間が過ぎた」とある。生きた魚を相手に、逃げられてもおかしくない行動をわざわざとっているのである。「まぼろしの魚」を追い求めてきたと書かれている以上、一度も目にしたことのない瀬の主は、太一が長年会いたいと願ってきたのは確かであるが、ここに流れる静かな時間と、魅せられたように緩慢な彼の動作は、殺戮の場にふさわしくない。殺そうとい

う意志をまるで感じさせないまま、泰然たる様子の巨大なクエを太一は息の続く限りじっと見つめるのである。瀬の主に破れ父が死んだということは、太一にとって忘れがたいものであったはずである。

- ・ 追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。
- ・ これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。

ここには、瀬の主への強い執着が示されている。「破った／破れた」と表現されるべき関わりとは、父と瀬の主の命がけの戦いによって生じるものである。「村一番のもぐり漁師だった父」をも凌駕する、恐るべき力を持った「まぼろしの魚」がいたということ。父の死は、そんな相手に挑んだ結果であったということ。右の表現からは、太一がこれまで、そのような思いを抱き続けながら、「父を破った瀬の主」を追い求めてきたことが読み取れる。そして読者は、この表現を言葉通りとらえた時、そこに太一の、瀬の主への恨みの感情が含まれていると考えてしまうだろう。彼は、父の無念を晴らしたいに違いないと。

しかし、魅入られたような太一の様子から、瀬の主への殺意が感じられないとすれば、父が瀬の主に破れて死んだという事は、太一にとって、瀬の主への恨みの感情に直接結びつかないことになる。彼は父の死をどのように受け止めてきたのだろうか。

この問いを解く鍵は、第三節の「父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。」という一文にある。

太一は父の死と、与吉じいさの死を同列に扱い、「海に帰った」と表現している。瀬の主に破れ、「ロープを体に巻いたまま、水中でとどまっていた」父の死と、文字通り畳の上での大往生をとげた与吉じいさの死を重ねあわせているのである。ここからは、太一が父の死を柔らかに受容し、過去の出来事に対する強い感情を持っていないことが感じられよう。それは、海に住むということが、人間の卑小さをつねに意識せざるを得ない、危険と隣り合わせのものであるからだ。たとえ漁師が海で命を落としたとしても、それは「海に帰った」と表現されるべきものである。海は命のみならず、命のみならずは命を奪うことはない。命は海に帰るだけだからである。父の死という結果は大変厳しいものであるが、海に生きる以上は、誰を恨むでもなく、受け入れるしかないのである。

右の引用で「まぼろしの魚」という表現が選ばれていることは見逃せない。「父を破った瀬の主」にめぐり会うことは「夢」と表現されている。ここからは、憎しみや恨みではなく、「村一番のもぐり漁師だった父」をも凌駕する「岩のような魚」に一目会いたいと願う、憧憬の念すら読み取れるのではないか。かなうもののない大魚への畏敬が、太一を引きつけてやまないのだ。瀬の主は父のかたきではないことを確認しておきたい。

2

さて、太一の出会った瀬の主が、父を破ったクエであったかどうか不明であること、さらに太一がかたきを討とうとして瀬の主を追い求めてきたのではないことを確認したところで、さらに、突然の転回が何によってもたらされたかを考えなければならない。

もう一度もどつてきても、瀬の主は全く動こうとはせずに太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

今、太一の目の前には「殺されたがっているのだ」と思えるほど「おだやかな目」をした大魚がいる。生き物としてそれはあまりにも不自然なことであるが、そうとしか思えないほど、もりを前にして瀬の主は全く動こうとしない。魚がどのような気持ちで殺されるかなど思いやったこともなく、「数限りなく魚を殺してきた」太一は、おもわず、この大魚に感情移入してしまう。目の前の大魚が「自分に殺されたがっている」と思えた時、太一の心にはじめて、魚を殺すことへのためらいやおそれが広がったのである。「こんな感情になったのは初めてだ」。

では、その次にあらわれた「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。」という一文は、何を表現しているのか。ここで注意しなければならないのは、そのような太一の思いを、瀬の主を殺さなければ、偉大な父を乗り越えることができないという意味に受け取ってはならないことである。目の前の大魚が「父を破った瀬の主」かどうかわからない以上、光村図書の指導書のように「父の命を奪った巨大なクエを自分の手で捕らえ、父を乗り越えよう」という、復讐による成長の論理はそもそも成り立たない。また、もしこれが

復讐のためではなく、瀬の主でありさえすれば、「父を破った瀬の主」でなくてもかまわないということであれば、太一の人間性が問われる事態となるであろう。太一がもし、瀬の主でありさえすればよいと考えているとすれば、それは彼が海のエエルキーの頂点に立つためと判断せざるを得ない。父についてはまだ、死の真相がさだかではないという逃げ道があるが、太一にはそういう言い逃れはできない。彼がもし、「本当の一人前の漁師」になるために何であれ、象徴的な意味を持つ瀬の主を殺さねばならないと願ってきたとすれば、それは自分の力の証明・誇示以外のなにものもないエゴイステイックな動機となる。それはあまりにも、この物語にそぐわない。何よりも太一は、この魚をとらなければ、「本当の村一番の漁師」になれないと思っているわけではない(4)。

わたしは太一が、一瞬の動揺の後、ためらいというものが、これからは漁師として生きていく自分の足枷になると判断したと読む。これからも「数限りなく魚を殺して」いかなければならない太一は、ためらいを抱えたままでは「本当の一人前の漁師にはならない」と考えた。「一人前の漁師」なら、どのような魚であっても、殺すことを躊躇してはならないということであろう。おそれ克服の近道は、その原因となった目の前の大魚をとることである。

しかし、頭でそう判断しても、太一の身体は反応しない。太一のなかに、畏敬の念すら抱く大魚を殺そうという意図はもともとなかったのだ。「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはならない」との判断も「泣きそうになりながら」下しているのであり、完全に腰が引けている。しかも、目の前の大魚はもはや、太一にはただの魚とは思えない。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かつてもう一度えがおを作った。

「おとう、ここにいられたのですか。また会いに来ますから。」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さなくてすんだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

「大魚はこの海の命だと思えた」とあるように、対峙するなかで、かなうものがない瀬の主は「この海の命」そのものだと太一の目には映った。「父もその父も、その先ずつと顔も知らない父親たちが」生まれ、育ち、帰っていったこの海の、命を大魚に見たというのである。巨大なクエが、この海に生きとし生けるものすべてを象徴するような存在だと思えたと思えばよいだろう。そして、解釈のわかれるところかもしれないが、「大魚はこの海の命だと思えた」からこそ、太一は瀬の主を殺さないと選択を笑顔で行うことができたのだとわたしは考える。この一文が登場するのは、すべての決着がついた最後であるが、実際には、葛藤が消えて太一がほほえんだ時点で、大魚に対する認識は大きく転換していなければならない。いや、新しい認識を得たからこそ、葛藤が消えて、太一は微笑んだのである。

右の引用の後半で、ここに父がいると「思うこと」によって、太一は瀬の主を殺さなくてすんだ」とある。ここで、便宜的な手段という性格が色濃くにじむ「こう思うこと」によって「しらないですんだ」という表現が用いられていることを見逃してはならない。瀬の主が「この海の命だと思えた」とするなら、海に帰った父がそこにいたとしても不思議はない。だがそれは、太一にとっては方便である。「この海の命だと思えた」瀬の主を殺したくなかった太一は、何らかの、殺さないですむ理由を見つけなければならなかった。それが、「こう思うこと」によって……という表現が選ばれた所以である(5)。

3

「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」に疑問が投げかけられ、軌道修正がはかられている国語教育の現状とは別に、教師が教材を深く理解するプロセスは、どんな時も大切に守られなければならない。教材の正確な内容と、それを理解する上でのポイントとなる箇所を教師が的確に把握することなしに、実りある授業が展開できようはずはない。たとえそれが、読解を目指す授業でないとしてもである。どんな教材にも、同じようにはまる便利な活動パターンなどないし、教材の個性のななめを見落とした授業は精彩を欠くはずだ。

「海の命」を理解するにあたって、まず、どうしても押さえなければならないのは、復讐譚ではないということである(6)。読者は最初、父と息子の絆を軸に物語を読もうとする。マンガやテレビの時代劇、映画を通して、殺された父のかたきを討つ息子の成長物語をいやというほど目にしてきたからだ。だが、そのようなころみは頓挫する。太一が、「父を破った瀬の主」に対する恨みを持たず、かたき討ちを望んでいないからである。あつげなくも彼は、目の前の大魚をとらないという選択を行う。「まぼろしの魚」を「追い求めてきた」のも、憧憬の念にもとづくものと考えられる。巨大なクエとの出会いの場面が、「父を破った瀬の主」であるかどうか、太一に確信を持たせない形で構成されているのも、この小説がそもそも復讐譚ではないということに理由が求められるであろう。小説の論理そのものが、父のかたきとの出会いを必要としないのである。

そして読者は、見込み違いの混乱を経たのち、復讐譚として読むことができなければならぬ。この小説の面白さ・教材として把握することが可能か、探らなければならぬ。「海の命」は、作品の表面に顔をのぞかせた表現の裂け目から、その内部へと、読者をいざなう性質を持つ小説である。それは「文学的文章の詳細な読解」を通してのみ気づく陥穽とすべきものかもしれないが、いったん気づいた以上、見すごすことはできない。ここに、この小説の面白さ・教材としての価値もある。

わたしは、教室で「海の命」を学ぶことを通して、解釈することの喜びを伝えられたいかと願う。小説に何が書かれているかを筋道立てて説明することは困難を伴うけれども、しかし詳細に読むことで本質が見えてくるのだということ、児童に理解してほしい。「小説はどうにでも読める」わけではない。そうでなければ、わざわざ教室で小説を読む意味はないだろう。児童自身が、さまざまな解釈の可能性を吟味し、こういうふうには読めないという判断の積み重ねのはてに、こうとしか読めないというところまで教材を追い込んでいくプロセスを体験してくれたなら、表現の奥深さを知る、魅力ある授業といえるのではないか。

*

さて、太一が復讐を目指していたのではないということ念頭に置いて「海の命」を読み直した時、浮かび上がってくるのは与吉じいさとの結びつきの深さである。

太一の父と与吉じいさは、漁によって生活を支えるということをめぐる、同じような考えを持っているかに見える。長年の漁師生活を経て、魚を捕ることへの強い執着をなくした与吉じいさは、「千匹に一匹でいいんだ。千匹いるうち一匹を釣れば、ずっとこの海で生きていけるよ。」と言いながら、毎日魚を二十四捕ると、もう道具を片付けるとい欲のない生活を送る。それは、海の恵みのおかげでようやく生きていける人間の生の卑小さをわきまえて、生息系のバランスを崩さないようにとの配慮を表現したものである。それに対して、太一の父も魚が捕れても捕れなくても変わりなく、たんたんと「海のめぐみだからなあ。」と言う。海の恵みに支えられて、自分たちのくらしが成り立っているということに感謝し、分不相応な欲を持たないように見える。一見したところ、二人は同質の哲学を持つように思われる。

しかし、太一にとってそれらは本当に等価だろうか。父が「潮の流れが速くて、誰にももぐれない瀬」を自分の漁場としていたこと、そこで岩のような瀬の主を挑んだ結果、破れて命を落としたと太一が認識していることをふまえるなら、父と与吉じいさには決定的な違いが設定されていると考えられる。すなわち、並ぶもののない自分の力を強く頼み、瀬の主を挑み、もりを向けるという父の振る舞いは、与吉じいさの教えと対比することで、分をわきまぬ傲ったものであると太一に受け止められたのではないだろうか。父の死が、海の下した罰だとまでは考えないだろうが、ますます太一は、瀬の主を恨むことができなくなる。

与吉じいさの死を受けて、「自然な気持ちで顔の前に両手を合わせ」ながら太一の言った次のことばは、与吉じいさとすこした日々が太一の人生観に強く影響していることを物語る。「与吉じいさ、心から感謝しております。お陰様でぼくも海で生きられます」。海のおかげで生かされる人間の命の卑小さをわきまえた与吉じいさは、多くのことを太一に教えた。「お陰様でぼくも海で生きられます」とは、過分の欲を捨てて海と共に生きた与吉じいさの教えをこれからも守り続けることの表明でもある。また、ここからは逆に、「千匹に一匹でいいんだ」とは考えない人、必要以上に海の恵みを求める人は「海で生きられ」ないという考えが読み取れる(7)。

「ずっとこの海で生きて」いきなければ、海の命を大切に守らなければならない。海の恵みをわけ与えられ、生かされてあることの幸せを知らなければならぬと、与吉じいさから教えられた太一は、海への畏敬の念を心に刻んだであろう。そんな太一が、圧倒的な存在感を有し、誰もかなうものがない「まぼろしの魚」に強く惹かれ、あこがれるようになったとしても何ら不思議はない。瀬の主とは、多くの命を重ね、巨大で並はずれた力を持つ、特別な魚の謂いであるのだから。クライマックスシーンで、太一がかつて父の選んだような、「破った／破れた」と表現される瀬の主との関わり方を選ばなかったのは必然である。彼はまさしく、与吉じいさの後継者であった。

瀬の主を捕らなかつた太一は、その後も「村一番の漁師であり続けた」。それは、瀬の主を捕ることに、実は何の意味もなかつたことを示している。太一の父のように命を懸ける必要はなかつた。与吉じいさの教えを忠実に守り、海の命が枯れぬよう、千匹に一匹という漁を続けるなら「ずっとこの海で生きていける」し、そのこと、村一番の漁師であることは何ら衝突しないのである。与吉じいさ同様、太一は幸せに生を全うするはずである。

注

- (1) 管見に入った限りでは、実践報告等を除くと、西辻正副「物語教材の読みの試みⅡ―文法読みによる『海の命』の作品分析―」(『国語教育学研究誌』20、一九九・三)、林廣親「古い皮袋に新しい酒は盛られたか―立松和平『海の命』をめぐる―」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編6年』教育出版、二〇〇一・三)、渋谷孝「作者の主旨の考察と読み手のテクストの読み」(田中・須貝編 同右書)のみである。

- (2) 「海の命」を考えるにあたって、実践報告や論文とともに、光村図書と東京書籍の教師用指導書を参照した。ところが、指導書を手にとって驚いたのは、教材についての解説がたいへん少なく、紙数の多くを活動案（指導のバリエーション）に割いていることである。とくに東京書籍は「主題をひとつに限定しない」立場から、内容の解説がほとんどない。これには強い違和感を覚えた。

唯一絶対の正解を児童・生徒に押しつける国語の授業の息苦しさは理解しているつもりであるし、「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」に疑問が投げかけられ、軌道修正がはかられていることもわかる。小説を扱いながらも、「読むこと」にこだわらない多様な授業を目指すべきであろう。だが、どのような方法であれ、魅力ある授業を展開するためには、教材を深く理解する上でのポイントを教師が正確に把握していることが前提となる。教科書教材として選び抜かれた小説の一つひとつには、奥行きのある主題や解釈の困難な表現、ひねりのきいたプロットなど、さまざまな特徴・工夫が込められているはずである。教室で児童・生徒同士に話し合わせる前の、教師自身の発見の場として、指導書の果たすべき役割があるのではないか。

(3) 注(1)参照。

- (4) すでに「村一番の漁師」である太一にとって、「村一番のもぐり漁師だった父」を乗り越えた先があるとすればそれは、「本当の村一番の漁師」以外にない。

(5) ここで、「…すんだ」という表現が用いられていることを見すべし、太一が実際に瀬の主に見ていると捉えてはならない。

- (6) 興味深いことに、立松自身はこのような自作の仕掛けに無自覚である。「もう一つのキーワードは『おとう』である。物語の中で父親は早く姿を消してしまふ。父の場所が空白なのだ。そこに座るのは太一しかない。これは父をなくした少年が自ら父になっていくという物語である。そのためには、父を殺した大魚をどうするかという関門を通り過ぎなければならぬ。／大魚をころさないでおこうという考えに至った太一は、いちだんと大きな父になることができたのだ。殺せるのに殺さないということは、実際に殺してしまうより以上の意味を持つ。太一は父を乗り越え、もっと大きな父になった。海が育ててくれたのである。」（立松和平「作者の言葉 海が育ててくれる」光村図書・教師用指導書）。立松は、父のかたき息子にめぐり会う物語として書いたつもりなのだ。時として、書き手にすら小説の機構が正確に見えないということが、「海の命」を読むことを通して理解できる。

- (7) 本文の最後に「巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生がいだれにも話さなかった。」とあるのも、そのことを知った誰かが、瀬の主をとろうと試みないとも限らないから、という配慮が働いたからだと考えられる。

※ テキストには、『国語 六年（下）希望』（光村図書、二〇〇三年六月発行、二〇〇一年一月二〇日検定済）を使用した。（やまもと・きんじ／弘前大学）

論文要旨

立松和平「海の命」を読む

小学校六年国語教材「海の命」は、教師用指導書や実践報告等を見る限り、父を殺された太一が、「父を破った瀬の主」を捕らえ父を乗り越えようとするものの、瀬の主を「海の命」と見ることと認識を転換し、共生を選ぶ物語として教授されているようである。しかし、太一から殺意が感じられず、瀬の主への恨みも読み取れないこと、太一の出会ったのが「父を破った瀬の主」かどうか確定できないことなどから、そもそもこの小説は復讐譚的枠組みとは無縁であると考えられる。作品に突然の転回をたらししたのは、太一がそれまでから抱いてきた瀬の主への憧憬であり、海への畏敬の念であった。「海の命」は、与吉じいさの後継者としての太一の生が描かれた作品である。